

と生命圏指数 (0.494) が低くて人間圏指数 (0.722) が高いのに対して、後者は地球圏指数 (0.669) と生命圏指数 (0.609) が高く、人間圏指数 (0.323) が低い。この場合、モロッコは人間の幸福や福祉が高いが、その基盤となる生態環境は、それほど強固なものではない。他方、コロンビアは、不測の死などの重い課題があるが、熱帯の生産性が高い環境にあり、将来の発展の可能性を秘めていると解釈できるであろう。付表には、生存基盤指数だけでなく、その元となる9つの指数それぞれの値が記載されているので、その中から必要な指数を読み取ることができる。地球や生命の中に、人間を位置づける (p. 138) という本書の目的も、地球と生命それぞれの指数と人間の指数とのバランスをみることで、より明確になり、本書の存在価値も高まると思われる。

### 引 用 文 献

FAO. 2010. *Global Forest Resources Assessment 2010*. Rome: FAO.  
環境省. 2012. 『平成 24 年版環境統計集』環境省。

水野一晴. 『神秘の大地, アルナチャル—アッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会』昭和堂, 2012 年, 232 p.

長岡 慶\*

本書は、インド、アルナーチャル・プラデーシュ州北西部 (ヒマラヤ山岳地帯) の自

然環境と、チベット仏教徒が大半を占めるモンパと呼ばれる人々の社会に関する概説書である。

アルナーチャル・プラデーシュ州は州全体がインドと中国間の国境係争地帯にあり、1990 年代まで外国人の入域が禁止されていた。現在も「特別区域入域許可証」の取得など種々の条件が義務づけられ、この地域に関する研究は未だ非常に少ない。そのなかで本書は同州のモンパ地域 (タワン県・西カメン県) で 2007 年から 2011 年まで度重なる現地調査をおこない、その成果をまとめた貴重なフィールドワークに基づく研究書となっている。対象とするモンパ地域はかつてチベットの一部であったが、1914 年のマクマホンライン策定以降インドに帰属している。

本書の構成は以下のとおりであり、前半 (1-4 章) は歴史や信仰を主に扱い、後半 (5-7 章) は土地利用を扱っている。

はじめに

第 1 章 「アルナチャルの自然と社会・民族」  
第 2 章 「チベットからアルナチャルへの王の移住とクランの成立」

第 3 章 「チベット仏教院による税の徴収とゾンの成立」

第 4 章 「チベット仏教, ボン (ボン) 教, 精霊信仰」

第 5 章 「森林分布と森林管理」

第 6 章 「ヤク放牧と牧畜民社会」

第 7 章 「農地の分布と農耕民社会」

おわりに

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

では、各章の内容を順に紹介していこう。第 1 章はモンパ社会に関する概論であり、モンパ地域は北部のタワン・モンパ社会（タワン県）、中部のディラン・モンパ社会（西カメン県）、南部のカラクタン・モンパ社会（西カメン県）によって構成される。北部はチベットやブータン、中部と南部はブータンやアッサムと隣接し、それぞれ使用言語（例えばタワン・モンパ語はチベット語に、ディラン・モンパ語はブータンの言語に近い）や生業、建物、習慣に違いがみられる。

第 2 章は、ディラン・モンパ社会におけるクランの系譜に焦点を当てた村の伝承や古文書の解説を通じて、チベットからの移住に関する歴史を明らかにしている。ディラン・モンパ社会では、9 世紀に政治的な権力争いを背景にチベットから王族がヒマラヤ山脈を越えてディラン地方に移住し独自のクランシステムを形成した。また、この王族は「ゾン」という居城を複数ディラン地方に建造した。17 世紀になると、モンパ社会はチベットに成立したダライラマ政権の支配下に組み込まれ、チベットの首都ラサへ続く税の徴収拠点として新たにゾンが建築された。本書の視点は、ここで 17 世紀から 20 世紀まで機能していた税制度の仕組みへと向けられていく。

第 3 章は、ゾンを拠点に徴収された税クレイについて述べられる。クレイは各地方で徴収され、牧畜民に対してはチーズやバターなどの乳製品が税の対象となり、農耕民に対してはオオムギなどの穀物や紙などの特産品が対象となった。これらの産物は年に 1 度、規定量（所有する土地面積により異なる）が

集落の首長ツォルゲンの家に一旦集められ、近くのゾンへ運ばれた。そこから税徴収官ゾンペン（チベットの高官）によりチベットへ運搬された。本書には、ゾンの配置やモンパ社会の各地方にはりめぐらされた税の運搬ルートが図示されており、この税制度はディラン・モンパ社会やカラクタン・モンパ社会でインド独立の 1947 年に、タワン・モンパ社会で 1951 年に終焉するまで、約 3 世紀にわたって維持され人々の生活の一部として社会に深く位置づけられていたことが明らかにされる。

第 4 章は、チベット仏教やボン（ボン）教などの信仰の側面からモンパ社会の特徴が述べられ、ここでも税が僧院と一般の人々をつなぐ重要な役割をしていることが示される。特に、タワン・モンパ社会ではゾンのほかタワン僧院にも税が支払われ現在に至るまで維持されている。また、かつてのゾンペンによる税の取り立ては厳しく、農民が逃げ出して残された土地はタワン僧院に接収・寄付された。タワン僧院はこれらの農地を各地の農民に貸出し、そこでの収穫物は耕作者と僧院で折半されている（このシステムを「ボマ」という）。

他方、モンパ社会ではチベット仏教だけでなく民間信仰も色濃く、例えば、山神への供物儀礼ラスシやアッサムからもたらされる悪魔に対する祓いの儀礼ホシナなどによって人々は神や霊とのつながりも保ち続けている。

第 5 章から、視点は自然資源利用へ移り、ディラン・モンパ社会の事例が主に扱われる。第 5 章では森林の領域区分と利用の違

いが述べられ、森林は①「落葉を集めるコナラ林（ソエバシン）」②「薪を集める森林（ボロン）」③「深い森（ムーン）」の領域に分かれている。①は家の周辺で直接管理され、コナラは農地の肥料や雑草の生育抑制、雨季の土壌流出の抑制などに使用され、伐採が禁止されている。その周りにある②は克蘭の共有地と個人の私有地に分かれ、薪の伐採に関して細かい規則が定められている。さらに奥地となる③は人々が足を踏み入れることを恐れる神や霊の領域となる。しかし、1980年代頃から有用材の不法伐採が相次ぎ、これら3つの森林区分は曖昧化しつつある。

第6章では、ヤクの放牧や牧畜民社会について述べられる。ヤクは牧畜民社会における生活の糧とされるが、実際にはウシと交配されてゾヤコトゥなど様々な種類の家畜が用途や適応高度によって使い分けられており、乳量や質、個体の取引額に違いがある。牧畜民は現在も季節移動をおこない、夏は標高約4,000 m地点まで上がって滞在し、冬・春は標高約2,500 mから2,700 m地点に下りるのであるが、インド政府は子どもの学校教育の必要性などから近年牧畜民の定住化政策を進め始めている。

第7章は、農地の利用や農耕民社会について述べられる。農地は高度で3つに区分され、それぞれに適した農作物が栽培される。さらに農耕民は放牧地も所有し、牧畜民から土地の使用税ツァリンを受け取って生計をたてている。他方で、牧畜民の側も上位克蘭の農耕民が所有する家畜の世話をし現金や塩、農作物を受け取っており、このような

両者のつながりは、ナツァン（先祖代々の交換関係）と呼ばれている。しかし、1962年の中国軍の侵攻をうけて本格化したインド政府による開発政策によってモンパ社会は近年急速な変容の下にある。

以上述べてきた本書の意義は、研究者の入ることの少なかったモンパ社会で現地調査をおこない、多角的視点からモンパ社会と自然との関わりを実証的に明らかにした点にある。特に本書は、税のシステムに注目することで、モンパ社会の所有や流通のあり方を地理学的手法から浮かびあがらせることに成功しており、ヒマラヤ研究全体に通じる新たな切り口を提示している。

また評者自身、モンパ社会（主にタウン県）で病や治療に関する研究をおこなっているのだが、本書を通じモンパ社会における食の変化や薬の利用をとらえるうえで個々の人々の間に形成される「所有関係」に注目することの重要性に気づかされた。

しかしながら、欲をいえば調査結果からさらに掘り下げてモンパ社会に関する著者の考えが聞きたかった。特に評者が議論の必要性を感じた点を2点述べたい。1点目は「変化」についてである。著者は本文の最後を「モンパ地域の昨今の開発は、いろんな面で古いものと新しいもの、固有のものと外来のものを急速に融合させ」（pp. 188-189）大きな社会変容をもたらしていると締めくくっている。しかし、社会変容の背景にあるのは政府主導の開発だけなのかという点は疑問である。モンパ社会はインド政府との関係だけが重要なのではなく、また地理的に隣接する

ブータンやアッサムとだけ関わってきたわけでもない。モンパ地域からアッサムに至る道路の一部は 1960 年代から 80 年代にかけてチベット難民の重労働によって建設されたものであり、その道路を通じてインド以外にも中国や韓国、ネパールなどで工場生産された多様な商品が流入し、市場がグローバル化しつつある。また、僧院やクリニック、孤児院などの施設設備に対して欧米の NGO による援助も一部でおこなわれている。モンパ地域の人々はグローバルな商品や設備を享受する一方、自らも交通網を駆使してインド世界やチベット難民世界へ自ら出かけ、教育を受けたり、仕事をしたり、巡礼をしたりして外の世界に働きかけている。こうした現状を踏まえると開発だけでなく多様な人・モノ・情報のグローバル化と人々の日常実践の相互作用の側面から社会変容に関する議論を今後おこなっていく必要がある。

2 点目は「農耕民社会／牧畜民社会」というとらえ方についてである。この二分法はモンパ社会の実状を十分に反映しているといえるのだろうか。そもそも農耕民・牧畜民という言葉はそれ自体、示す範囲が曖昧であり（例えば、先祖代々牧畜に従事していたら、その子どもは商売をしても牧畜民と呼ぶのか）、評者はこの言葉で社会を説明することに違和感を覚えざるを得ない。実際のモンパ社会には、商店や役所、観光業などのサービス業に従事する人々や、教師や医師、看護師、民間治療者などの教育・医療に携わる人々、農耕と牧畜の両方を兼業する人々（ジミタン地方など）など二分法の枠に収まり

きらない人々が多数存在しているのであり、「農耕民か牧畜民か」という見方はモンパ社会がまるでたった 2 種類の人間によってのみ構成されているかのようで現実的ではない。高度差による家畜・農産物の利用の違いから、さらに視点を広げて人々の生の営みをとらえ議論する必要がある。

以上の 2 点は、モンパ社会だけに限らず、ヒマラヤ山岳地域の研究者にとって重要な課題となってくるであろう。本書はその出発点として是非読んでおきたい一冊である。

小杉 泰、『イスラーム 文明と国家の形成』京都大学学術出版会、2011 年、540 p.

中西竜也\*

本書は、7 世紀から 10 世紀におけるイスラーム文明の勃興・形成の過程を多面的かつ詳細に描きだすとともに、文明としてのイスラームの特質を明快に説いた大著である。本書によって我々は、イスラーム文明の初期における政治・社会・文化のダイナミックな展開様相をかなり詳細に知ることができるのみならず、イスラーム文明の基本構造や特徴を体系的に把握することも可能である。しかも本書は、通説とされてきた事柄や欧米の大家の学説にも果敢に疑義を呈し、著者の刺激的な創見が随所にあふれている。こうした真摯で熱情的な探求の姿勢も、本書の大きな魅力である。

\* 京都大学白眉センター